

多様な市民的教育運動の中の母親たち

— 特集について —

編 集 部

この特集は県内で繰り広げられている親たちを主体にした多様な教育運動を紹介する意図で組みました。

わが子を学校に通わせ始めて、「こんな悩みを抱えたとき、よそのお母さんたちはどのように考えているのだろう。是非、話し合いたい、相談したい」という方々に届くことを願っています。

かつて、高度経済成長期に総評などの労働運動や日教組などの教員組合運動また革新自治体の政策にも支えられて、「高校新增設」等を中心とした教育要求実現のために広範な住民運動が展開されてきました。

そうした流れは今も「三〇人学級実現」の三千万余の署名運動として教職員組合を中心に展開され、各自自治体の「小人数学級」実現の教育政策を押し進める力になっていきます。

しかし、今日の段階では労働運動に替っての勢いがなく、教育運動も替っての労働組合本部主導型で運動を支援され、展開されてゆくことが少なくなりました。新潟県では教職員組合主導で三〇人学級実現の署名運動や高校の整備統合に關しての住民要求実現の運動等が継続的に展開されており、学校（職場）の組合（分会）を運動体の基本として、その地域の教育課題や一人一人の親たちの願いを組織してこつこつと実現して行く教育運動がなかなか根づかないまま今日に至っています。

切実な教育の諸課題が山積みしています。その中でわが子の子育ての課題を実現するために、親たちは一人また一人と手をつなぎ合い、自力で組織を立ち上げ、それぞれの課題についての学習を専門家の支援をえて

積み重ね、また組織造りの豊かな経験を蓄えた男性たちも加わったあたらしい教育運動が繰り広げられます。

取材する中で、それぞれの子育ての願いに関する深い思いとそれを持続し、たかめるための様々な専門的な学習活動やネットワークづくりを実践的に展開してゆくあたらしい母親像を実感しました。

今、不況、リストラの嵐の吹き荒れる中で、木の葉のように揺れているのが家庭です。そのおかれている子育て環境は悪化の一途をたどっています。高度経済成長期から企業社会にしばらく家庭をかえりみる余裕をもてなかった多くの男性は、この不況下で一層の企業への従属を強いられています。

この企業社会下の日本的家族の在り方の転換の道をさぐる意味で、また、教育要求運動の今日的なエネルギー源はなにか、今日の到達点をさらに飛翔させる展望は何か考える上でも参考になりました。

特集のタイトルをそうした意味で、「多様な市民的教育運動の中の母親たち」としたので。

ここに、報告できるのは私たちの研究所が知り得た

範囲のもので。この他に全国組織は動き出しているが、県内では動き出したばかりで取材を遠慮した「非行を考える親の会（新潟日報〇一年十一月三日付けで紹介）」や、同じく取材できなかった「自閉症児を抱える親の会（新潟日報〇一年十二月七日付けで紹介）」などもあります。さらに、公民館などの社会教育の分野での親と子どもの豊かな活動も展開されています。これも取材できませんでした。研究所の力量を高めて、もっと皆さんに役立つ情報を提供しなくてはということを痛感しました。

